
Specisl Force School (特殊部隊学校)

ACE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Special Force School (特殊部隊学校)

【Nコード】

N3768Z

【作者名】

ACE

【あらすじ】

世界中の地図の一部にしか載っていない日本の領海にある島で繰り広げられる学園と戦闘のオリジナル小説。

主人公の東出 将は2年なのに特殊部隊への推薦がくるほどの実力者だ。

そして将の幼馴染の志倉 茉都香とその他の個性的なキャラによる小説です。

第一射

「おはよー」

茉都香が後ろから飛びかかってきた。

「おっとと、危ないだろ!!」

「将なら大丈夫だってww」

「お前なあ、まあいいか」

朝から茉都香と話していると周囲から妬みの視線が向けられていた。中には銃を抜いているやつまでいた。

「森山とめるな！俺にあいつを撃たせろ！」

「高橋、学年かわって早々殺人は御免だぜ。」

先ほど俺を撃とうとしていた方は高橋たかはし 真司しんじはとてもバカだ。すぐに銃を抜こうとする。

もう一人は森山もりやま 辰雄たつおといいいつも高橋の暴走を抑えているしつかり者だ。普段は俺と茉都香、高橋、森山の四人で話してることが多い。

「チイツ」

高橋は舌打しながら愛銃のS&W MK22 Mod0を

シヨルダーホルスターにしまった。

(いまさらだがさすがSFSって感じだな)

高橋の銃のS & amp; W MK22 Mod0は別名ハツシユパ
ピーといい世界の数多くの特殊部隊や軍隊で採用されているおもに
暗殺に使われる銃だ。だが精密にできているため精度がよくSFS
で使用している奴も多数いる。

ちなみに森山の銃は四六時中M-200を持ち歩いている生粋のス
ナイパーだ。一応サブ装備としてM92Fのミリタリー^{ヘレット}モデルを持
っているが使っているところは見たことがない。

「ところでさあ今日の一限目のやつ自身ある？」

森山が気を使って話題を変えてくれた。

一限目のやつとは爆弾の解体実習のことである。SFSはあらゆる
テロに対応するため爆弾解体や飛行機への突入実習などを行ってい
る。

これらの実習は、基本二人一組になり小隊単位で行っている。

ちなみに六人組を中隊といいその中の二人組を分隊と読んでいる。

「十、九、八・・・」

「やべえ尾松がカウントダウンはじめやがったぞ!!」

尾松とは生活指導の先生でアメリカ人と日本人のハーフでアメリカ
海軍にアメリカ国籍を持っていないのに血が混ざっているという理
由ではいつていてしかも重要職についていた経歴を持っている鬼教

官である。

「急げ急げ！新学年から遅刻はいたいぞ！」

こんな時でも高橋のテンションは高い。

「ゴメン将！！！」

茉都香からのいきなりの謝罪に混乱していると踏み台にされて俺は倒れた。茉都香はジャンプのおかげで「五」で校門を抜けた。俺は0.5秒で起き上がり走り出……

ドタッ

「ゴメン志倉さんとの事わすれたわけじゃないんだ。」

せなかつた。高橋に足をかけられて盛大に転けた。転んだせいで間に合わなかつた。

肩に手が置かれた。

(茉都香かなあ・・・慰めてくれて……)

肩に手を置いていたのは尾松だった。

(……うう、吐き気が。)

「残念だが規則は規則だ。」

尾松がニツコリ笑顔で言ってきた。

その後俺は数枚の資料と原稿用紙十枚分の反省文を書かされた。

第一射（後書き）

どうもいるよう投稿のACEです。

読んでくださった方本当にありがとうございます。

なお作者は学生で今受験を控えているため更新が不定期になったり
前期選抜で落ちると更新が止まることがありますのでその点を踏ま
えてください。

駄文ですがこれからもよろしく願います。

第二射

反省文を書き終えた俺は教室に向かって歩いていった。

新学年になりクラスが変わった事により教室がガヤガヤしている。

とおつてもニクラスしか無いので約半分は同じメンツなのだから・

（なんで遅れてすぐに反省文なんだ！？普通は後日提出とかじゃないのか？）

と考えていると自分の教室についた

「おはようございます。諸事情により遅れました。」

和やかにドアを開けたら先程の高橋が発砲して来たので二点バースト（改造により実現）に桜シグを切り替え初弾装填を高速で行い一発目を高橋の放った弾にあて逸らしつつ、二発目を高橋の脇腹に当てた。

「グハッ」

高橋が悶絶しているうちに席についた。

そこで「朝はごめんね」と茉都香が手おあわせて言ってきたので

「気にするな、お前までなら間に合ったのに・・・悪いのは高橋の奴だ。」

と返しておいた。

「オクレテスイマセン」（遅れてすいません）

未だに日本語が片言なアインシュタイン三世が入ってきた。

この人はアインシュタインの孫で能力もアインシュタイン並だ。

俺の桜シグはフルオート・セミオート・二点バースト・三点バーストと切り替えができるようになっていて。この改造をしてくれたのはこの先生だ。

本来なら違法改造なのだがこの島に籍を置くのにのみ改造を認められている。（各銃メーカーの代表を脅して認めさせた。）

そのため自由に改造できる。この制度のためにアインシュタイン三世はこの島にいるのだ。

そうこうしているうちにHRホームルームが終わって最後の連絡を伝えようとしている時に>バタン！< ドアを勢いよく開ける音がして

「東出！至急作戦室だ！チムメン連れて来い！」

「了解！高橋・森山・茉都香・岡本・山田来てくれ。」

いつもの4人+岡本・山田という6人チームで動くことにした。

岡本は重歩兵でベネリのM4 3inchモデルをぶっ放しても反動なんてないののように連射する巨漢の持ち主だ。

山田は岡本とチームを組んでいるやつで、愛銃はVZ・58という精密型の銃だ。岡本の影から相手に正確な射撃をすることができる凄腕の持ち主である。

「何があっただろう?」

とみんなで話しながら作戦室に向かう俺たちであった。

第二射（後書き）

どうもACEです。

2射を読んでいただきありがとうございます。

一生懸命頑張りますのでどうぞよろしくお願いします。

感想・誤字脱字・要望等よろしくおねがいます。

第三射

「現在訪問中のオーストラリア財務大臣が誘拐された。」

「……………!?」「……………」

「質問いいですか？」

森山が許可を求めた。

「なんだ？」

「なぜSATではなくここなんですか？」

「今回の財務大臣による訪問が非公式だからだ。」

「!?わかりました」

財務大臣が非公式での訪問だったためニュース等になっていなかった。そのため俺が事件を予想出でなかつたというわけだ。

「現在犯人たちは広島県霜月しもつき高校に立て籠もり中だ。東出のチームで制圧してくれ」

「……………了解!!」「……………」

「全員防弾チョッキ・メット等を夜襲用に変更して第二ヘリポート集合だ。」

「「「「了解」「」「」

ここで説明しておこう。

夜襲用とは迷彩服が黒で防弾チョッキも黒、メットも黒という夜に着ることが多い服装にNVG（ナイト ビジョン ゴーグルの略だ）を装備したものだ。マズルフラッシュ（発射時に発光した光のこと）による失明を防ぐためすべての銃にサイプレッサーを付ける。

そして岡本はM4ではなくこういう時のためのAK-74を持ってくるように指示した。

「俺は単独で、茉都香と高橋、岡本と山田のペアと森山の狙撃という小隊に分ける。ヘリに乗り込み装備の最終確認だ。終わり次第でるぞ！」

「「「「了解」「」「」

第三射（後書き）

どうもACEです。

第三射を読んでくださった皆様ありがとうございました。
いつも文字数少なくてすいません。
でも学生ということので許してください。

ではSFSをよろしく願いますm（）（）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3768z/>

Specisl Force School (特殊部隊学校)

2011年12月14日18時51分発行